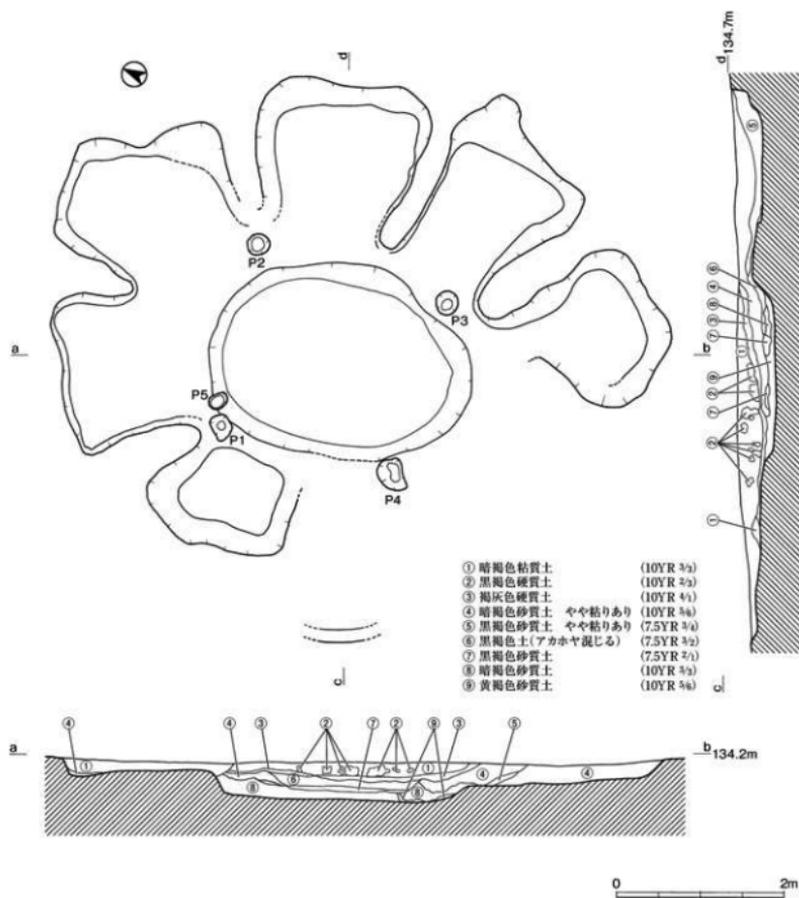


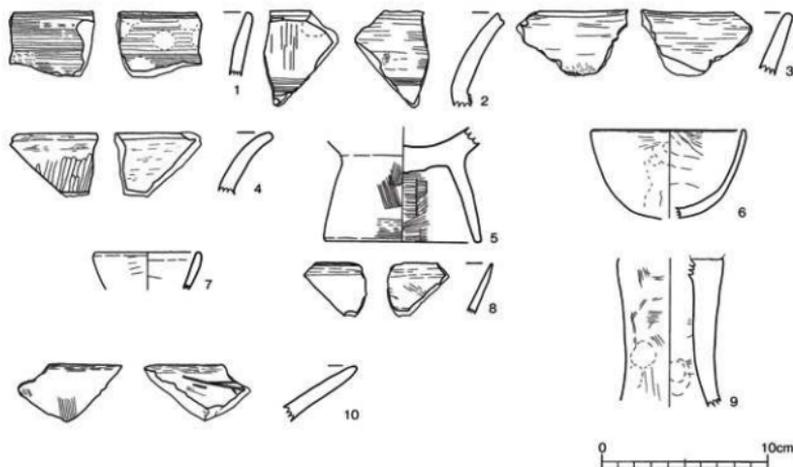
第143図 43号竪穴住居跡出土土物

第35表 42号竪穴住居跡出土土物観察表

棟号	住居No	遺物番号	器種	部位	口径			調整・文様		色調		胎土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面		
141	42	1	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	暗赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		2	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒	にぶい赤褐色	石英、角閃石	—
		3	甕	口縁部	7.3	—	—	ハケメ、ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石英、長石、角閃石	—
		4	ミニチュウ字	底部	—	—	—	ハケメ	ナデ	にぶい黄褐色	明褐色	石英、長石、角閃石	—
		5	甕	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	明赤褐色	暗赤褐色	石英、長石、角閃石	—
		6	鉢	口縁部	10.2	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	黒	石英、長石、角閃石	—
		7	蓋環	環部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	にぶい橙	橙	石英、長石、角閃石	—
		8	蓋環	環部	—	—	—	ミガキ、ナデ、ケズリ	ナデ、ミガキ	明赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	黒鉄あり
		9	蓋環	胴部	—	—	—	ミガキ、ナデ、蓋付キ工	蓋付キ工	明赤褐色	明赤褐色	石英、長石、角閃石	—



第144図 44号竪穴住居跡



第145図 44号竪穴住居跡出土遺物

44号住居竪穴住居跡(第144図)

B・C-23・24区。Ⅲa層で検出した。形状は長軸約720cm×短軸約680cmの不定形である。緑辺部に張り出しを多くもついわゆる花卉状住居である。埋土を掘り下げて行く過程で、不定形の色の違う尾プランが確認できた。さらに色の違う場所を掘り下げていくと、緑辺部のプランは花卉状になっていた。北側と東側からは明瞭な形の花卉が検出されたが、西側は削平を受けており、花卉の緑辺部の一部しか検出されなかった。調査は、埋土観察ベルトを設定して、中央から床面を確認していく方法で掘り下げていった。中央部からこの住居の床面と思われる、硬くしまった貼り床面が検出された。緑辺部の花卉部は1辺が約200cmで、中央部から緑辺部に向かう張り出しの線が1辺が約160cm～約200cmと、ある程度規格性があると思われる。中央部の貼り床面を剥がすとその下が急激にくぼんでいることが確認できた。検出面から床面までの深さは約34cmを測る。

中央部外側緑辺から4基のピット、中央部内の緑辺部から1基のピットが検出された。それぞれのピットの距離は、P1→P2が約220cm、P2→P3が約240cm、P3→P4が約220cm、P4→P1が約200cmでそれぞれ直交する。P5は中央部内の緑辺部に位置している。これらのピットは、その位置及び形状から、この住居に伴う柱穴になると思われる。

出土遺物は、成川式の甕形土器や壺形土器の土器片が出土し、接合作業等を経て10点を図化した。

第36表 43号竪穴住居跡出土遺物観察表(1)

検出	住居 NO	番号	器種	部位	口径			高さ		調整・文様		色調		胎土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面				
143	43	1	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい褐色	縹	石英、炭石	-	-	
		2	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石英、炭石、角閃石	-	-	
		3	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石英、炭石、角閃石	-	-	
		4	壺	口縁部	-	-	-	ハケメ縁ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石英、炭石、角閃石	燻行線	-	
		5	壺	口縁部	-	-	-	ハケメ縁ナデ	ナデ	にぶい褐色	赤褐色	石英、炭石	-	-	
		6	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄褐色	にぶい黄褐色	石英、炭石	-	-	

44号竪穴住居跡出土遺物(第145図 1～9)

1～4は甕形土器の口縁部である。口唇部の形状は、1・3は舌状になり、2は平坦になる。2は口唇部に段がつく。器形は、頸部方向から口唇部にかけて、外反する器形をしている。5は甕形土器の脚部である。6～8は小型丸底壺である。内外面ともに丁寧なナデによる調整である。9は高坏の筒部である。外面は、研磨による調整がなされている。10は鉢の口縁部である。

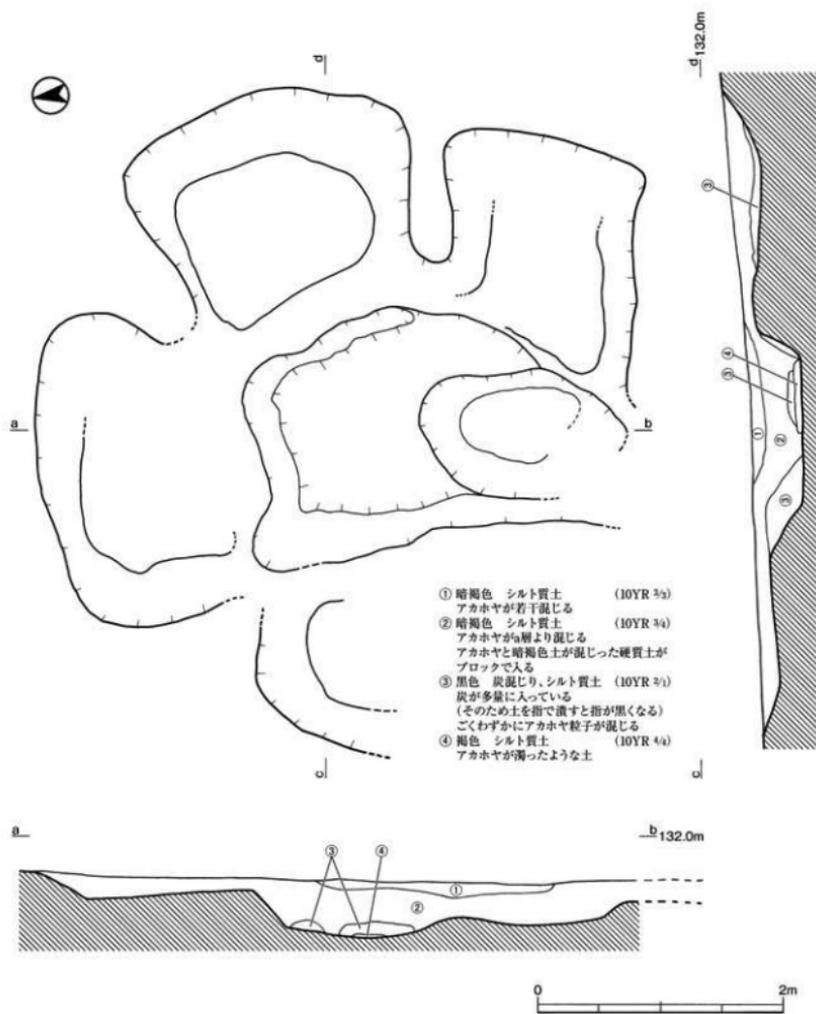
45号竪穴住居跡(第146図)

C-24区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約530cm×短軸約492cmの不定形である。縁辺部に張り出しを多くもついわゆる花卉状住居である。埋土を掘り下げて行く過程で、不定形の色違う尾プランが確認できた。さらに色の違う場所を掘り下げていくと、縁辺部のプランは花卉状になっていった。北側、東側からは明瞭な形の花卉が検出されたが、西側は、削平を受けており、花卉の縁辺部の一部しか検出されなかった。調査は埋土観察ベルトを設定して、中央から床面を確認していく方法で掘り下げていった。中央部からこの住居の床面と思われる、硬くしまった貼り床面が検出された。中央部の南側には、土坑を確認することができた。検出面からの床面までの深さは約48cmを測る。

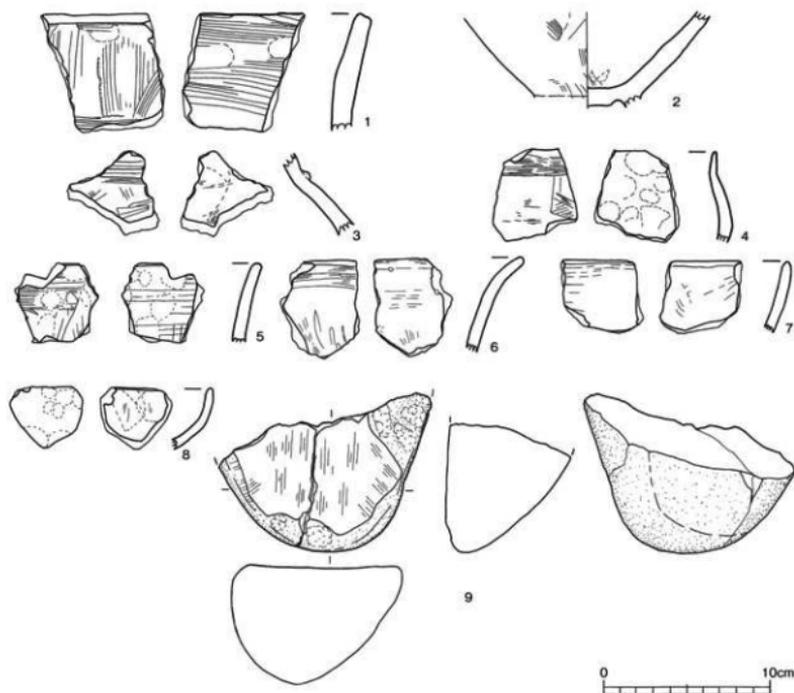
この住居からは、ビッドは検出されなかった。出土遺物は、成川式の甕形土器や壺形土器等が出土し、接合作業等を経て、8点を図化した。

第37表 43(2)・44号竪穴住居跡出土遺物観察表

神宮	住居NO	番号	器種	部位	口径			調整・文様		色調		胎土	備考		
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面				
143	43	7	壺	頸部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	-		
		8	壺	胴部	-	-	-	ハケメ、突帯	ナデ	にぶい赤褐色	黒褐色	石灰、長石、角閃石	煤付着		
		9	壺	趾～脚部	-	10.8	-	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石	-		
		10	壺	趾～脚部	-	-	-	工具ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	線を多く含む		
		11	鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	にぶい橙	石灰、角閃石	-		
		12	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	-		
		13	小型丸底壺	口縁～底部	10.6	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	赤褐色	石灰、長石	-		
		14	壺	頸部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石灰、長石、角閃石	-		
		15	小型精製土器	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい黄褐色	灰黄褐色	長石、角閃石	-		
		16	小型精製土器	底部	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	褐色	淡黄	石灰、長石	-		
		17	メシロ	-	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石灰、長石、角閃石	-		
		145	44	1	壺	口縁部	-	-	-	ハケメ	ハケメ	黒褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石	-
				2	壺	口縁部	-	-	-	ハケ後ナデ	工具ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石灰、長石、角閃石	-
				3	壺	口縁部	-	-	-	ハケ後ナデ	ナデ	にぶい橙	にぶい橙	石灰、長石	線を多く含む
				4	壺	口縁部	-	-	-	ミガキ後ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
				5	壺	底部～脚部	-	9.2	-	ナデ	ケズリ後ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、長石	-
				6	小型丸底壺	口縁～底部	9.5	-	-	ナデ	ナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
7	小型丸底壺			口縁部	-	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	赤褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	-		
8	小型丸底壺			口縁部	-	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	明赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	-		
9	高坏			胴部	-	-	-	丁寧なナデ	丁寧なナデ	黒褐色	黒	石灰、長石、角閃石	煤付着		
10	鉢			口縁部	-	-	-	ハケメ後ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、長石	-		
神宮	住居NO	番号	器種	石材	最大径 cm	最大幅 cm	最大厚 cm	重量 g	備考						
143	43	18	磁石	砂岩	13.6	11.6	5	992	-						



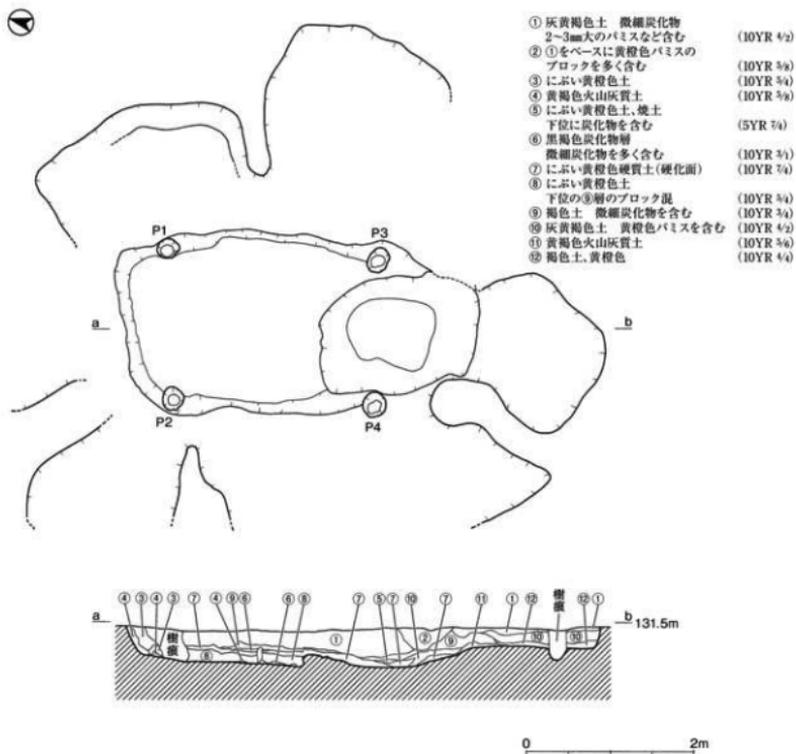
第146図 45号竪穴住居跡



第147図 45号竪穴住居跡出土遺物

45号竪穴住居跡出土遺物(第147図 1~9)

1は甕の口縁部である。口唇部は平たく、内面が外面よりも、やや高い。器壁は厚く、外面の調整はハケメである。2は甕形土器の底部である。底部の脚部が剥落している。調整は内外面ともナデである。3は突帯を有する壺形土器の肩部である。突帯は、貼り付けてあり、形状は断面三角である。4は小型の短頸壺の口縁部~頸部である。頸部で、段がつきはっきりとした稜をもつものである。5は壺形土器の口縁部である。調整は内外面ともナデであり、焼成はよい。6は高杯の杯部である。外面の調整は丁寧なナデである焼成はよく胎土に角閃石を含んでいる。7は鉢形土器の口縁部である。口縁端部は、三角形の形状を成す。8はミニチュア土器である。調整は内外面ともに指オサエが認められる。小型の鉢形土器の様相を呈すると思われる。9は磨石である。



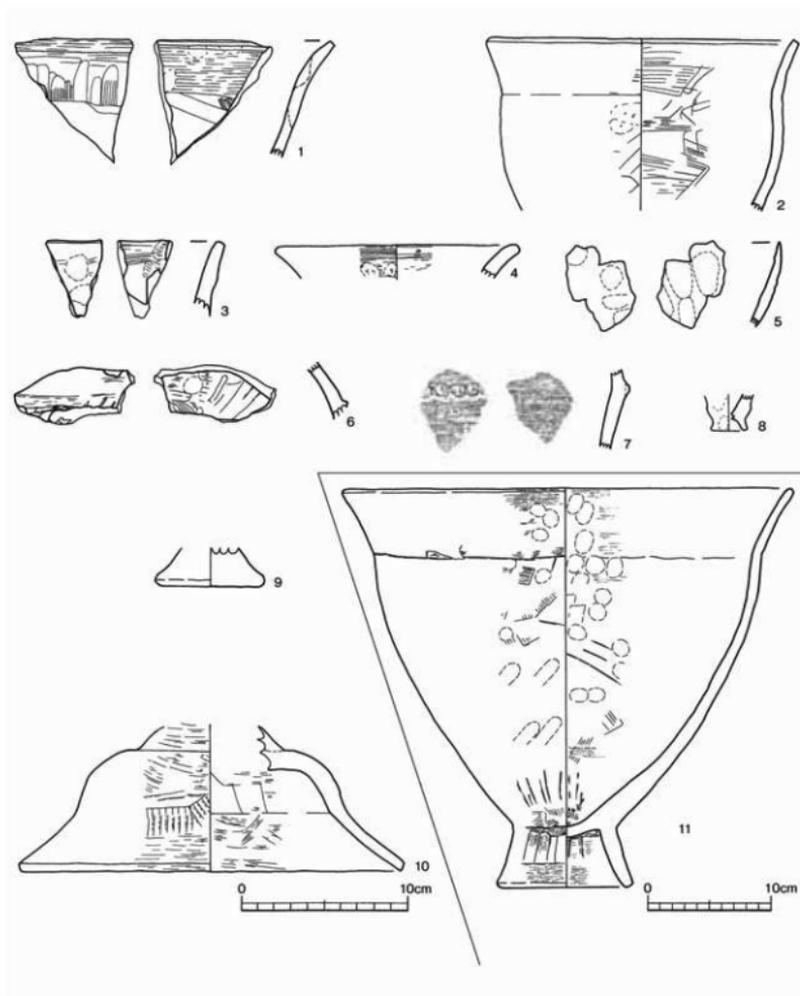
第148図 46号竪穴住居跡

46号竪穴住居跡(第148図)

C・D-23・24区, IIIa層で検出した。形状は長軸約700cm×短軸約594cmの不定形である。緑辺部に張り出しを多くもつ花弁状住居である。埋土を掘り下げて行く過程で,不定形の色の違うプランが確認できた。さらに色の違う場所を掘り下げていくと,緑辺部のプランは花弁状になっていった。西側の一部は調査区外であり,全てのプランは検出されなかった。住居跡の緑辺部は明瞭に残存している部分もあるものの一部しか残存していない部分もあった。検出面からの床面までの深さは約48cmを測る。

中央部の凹地緑辺部からは,4基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は, P1→P2が約180cm P2→P4が約240cm, P3→P4が約180cm, P1→P3が約270cmの長方形を成す。これらのピットの配列は,それぞれ直交する。このようなことから,これらのピットは,この住居に伴う柱穴の跡であると思われる。

出土遺物は,成川式の壺形土器や壺形土器等が出土し,接合作業等を経て,11点を図化した。



第149图 46号竖穴住居跡出土遺物

46号竪穴住居跡出土遺物 (第149図 1~11)

1~3・11は甕形土器である。1・2は口縁部~胴部であり, 11は完形である。口唇部の形状は, 全て平坦である。器形は3・11は頸部で内側に締まりその後外反する。11の底部付近は赤化しており, 火熱を受けたあとが窺える。4・6・7は壺形土器の口縁部, 肩部である。7は一条の突帯を有する。突帯の調整は, ヘラ刻みである。5は小型丸底壺である。内外面の調整に指オサエの痕がある。10は蓋である。内面の口唇部にススが附着しており, 蓋と判断した。

第38表 45~47号竪穴住居跡出土遺物観察表

神田	住居NO	番号	器種	部位	口径			器高		調整・文様		色調		胎土	備考
					cm	mm	mm	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
147	45	1	壺	口縁部	-	-	-	ハケメ	ナデ	横	横	横	横	赤	
		2	壺	胴~底部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤焼	暗赤焼	暗赤焼	石灰, 長石	線を多く含む	
		3	壺	肩部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤焼	赤焼	赤焼	石灰, 長石	-	
		4	小型短頸壺	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい赤焼	にぶい赤焼	にぶい赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		5	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤焼	赤焼	赤焼	石灰, 長石	-	
		6	高坪	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤焼	横	横	石灰, 長石, 角閃石	-	
		7	鉢	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤焼	明赤焼	明赤焼	石灰, 長石	-	
		8	ミニチュア	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	にぶい焼	にぶい焼	にぶい焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
149	46	1	壺	口縁~胴部	-	-	-	ハケメ後ナデ	ナデ	横	横	横	石灰, 長石, 角閃石	-	
		2	壺	口縁~胴部	18.9	-	-	ナデ	ナデ	赤焼	黒焼	黒焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		3	壺	口縁部	-	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ	黒焼	にぶい焼	にぶい焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		4	壺	口縁部	14.6	-	-	ヘラナデ	ナデ	黒焼	黒焼	黒焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		5	小型丸底壺	口縁~胴部	-	-	-	指オサエ	指オサエ	横	横	横	長石	-	
		6	壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	横	横	横	石灰, 長石	-	
		7	壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒焼	にぶい赤焼	にぶい赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		8	ミニチュア	胴~胴部	-	2.3	-	指オサエ	ナデ	赤焼	赤焼	赤焼	石灰, 長石, 雲母	-	
		9	高坪	胴部	-	6.6	-	ナデ	-	赤焼	-	-	石灰, 長石, 角閃石	-	
		10	蓋	-	22.8	-	-	ハケメ・ナデ	ナデ	横	横	横	石灰, 長石, 角閃石	内面に煤付着	
		11	壺	完形	36.6	11.1	32.7	ハケメ後ナデ	ナデ・指圧痕	暗赤赤焼	黒焼	黒焼	石灰, 長石	-	
151	47	1	壺	口縁~胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	暗赤焼	にぶい赤焼	にぶい赤焼	石灰, 長石	-	
		2	壺	口縁~胴部	22.7	-	-	ナデ	ナデ	暗赤焼	にぶい赤焼	にぶい赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		3	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	横	横	横	石灰, 長石, 角閃石	-	
		4	壺	胴部	-	-	-	ハケメ	ナデ	黒焼	黒焼	黒焼	石灰, 長石	-	
		5	壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒焼	横	横	石灰, 長石, 角閃石, 雲母	-	
		6	壺	胴部	-	10.6	-	ハケメ	ナデ	にぶい赤焼	にぶい赤焼	にぶい赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		7	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	横	横	横	石灰, 長石, 角閃石	-	
		8	壺	胴部	-	-	-	ハケメ後ナデ	ナデ	明赤焼	明赤焼	明赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		9	壺	口縁部	-	-	-	指オサエ・ナデ	指オサエ	にぶい赤焼	にぶい赤焼	にぶい赤焼	石灰	-	
		10	蓋	胴~底部	-	-	-	ミダキ	ナデ	暗赤焼	明赤焼	明赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		11	鉢	口縁~胴部	13	-	-	工具ナデ	工具ナデ	横	明赤焼	明赤焼	石灰, 長石, 角閃石	-	
		12	壺	胴~底部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤焼	赤焼	赤焼	石灰, 長石, 角石	布目別調整	

神田	住居NO	番号	器種	石材	最大長		最大幅		重量	備考
					cm	mm	cm	mm		
147	45	9	磁石	砂岩	9.6	12.9	7.6	7.94	-	

47号竪穴住居跡(第150図)

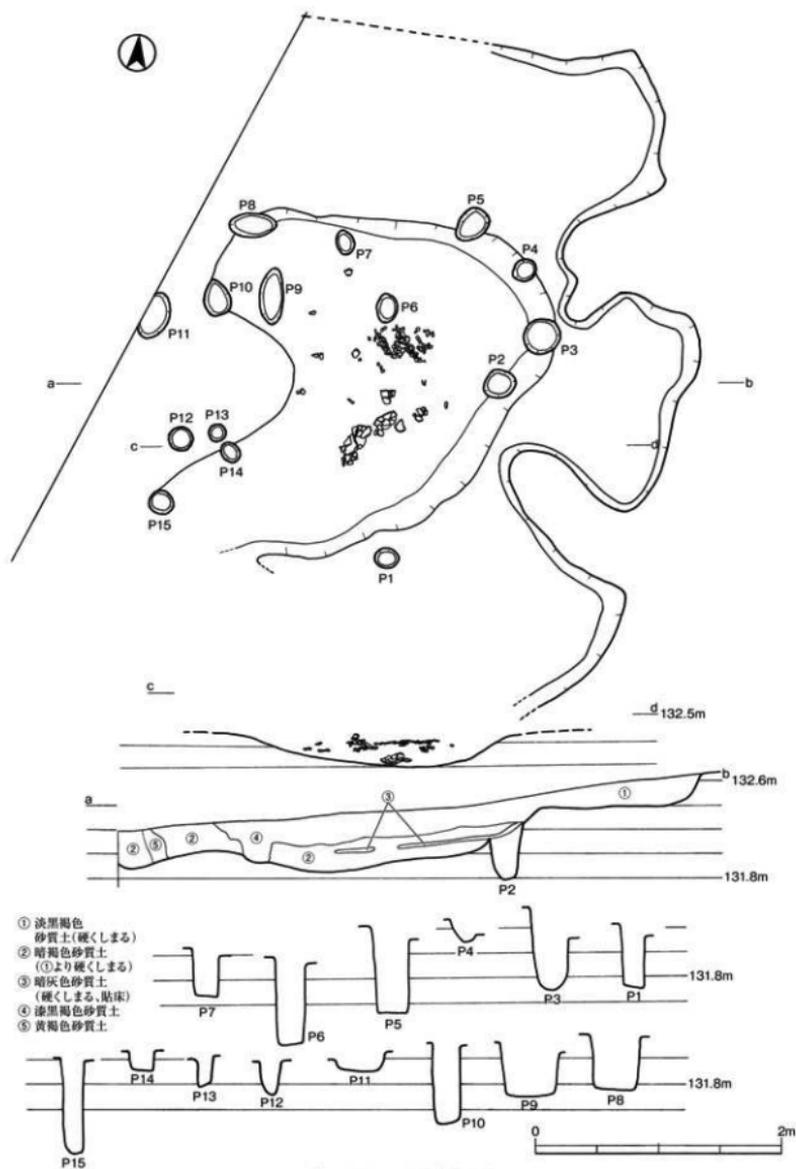
C-31区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約484cm×短軸約410cmの不定形である。緑辺部に張り出しを多くもついわゆる花卉状住居である。埋土を掘り下げて行く過程で、不定形の色の違うプランが確認できた。さらに色の違う場所を掘り下げていくと、緑辺部のプランは花卉状になっていった。南側の一部は、確認トレンチによって削平を受け、西側の一部は調査区外であるため、全てのプランは検出されなかった。検出面からの床面までの深さは約48cmを測る。

この住居からは、15基のピットが検出された。これらのピットは、全て住居の中央部から検出されている。これらのピットの配列は、P1を頂点として、P2～5に放射状に伸びるグループと、P6を頂点として、P7～15に放射状に伸びる二つのグループに分けることができると思われる。それぞれのピット間の距離は、P1→P2が約180cm、P1→P3が約220cm、P1→P4が約260cm、P1→P5が約280cm、P6→P7が約60cm、P6→P8が約120cm、P6→P10が約140cm、P6→P14が約170cm、P6→P13が約170cm、P6→P9が約80cm、P6→P12が約200cm、P6→P11が約180cm、P6→P15が約240cmである。これらのピットの中で6基は、中央部の掘り込みの緑辺部に位置している。断面から杭状になるものや、下面部が平坦になっている物がある。これらのことから、この住居から検出された、ピットはこの住居に伴う柱穴であると思われる。

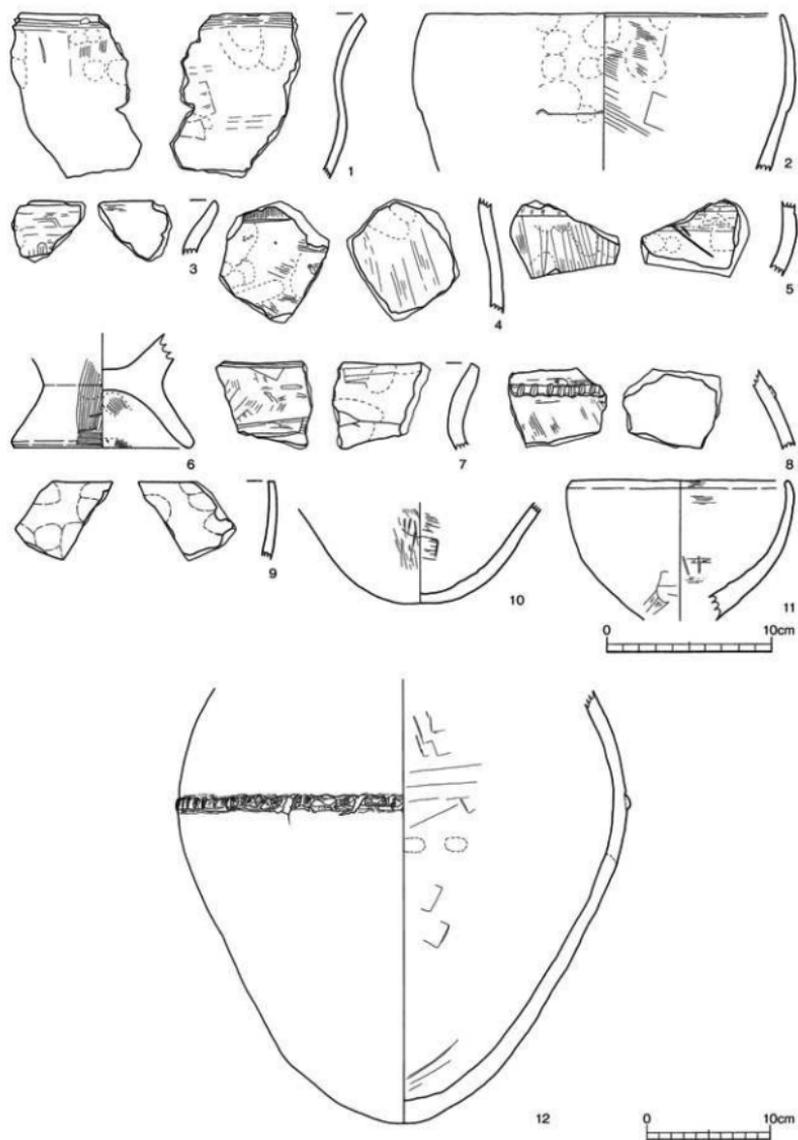
この住居からは、甕形土器や壺形土器の土器片が出土し、接合作業等を経て11点を図化した。

47号竪穴住居跡出土遺物(第151図 1～12)

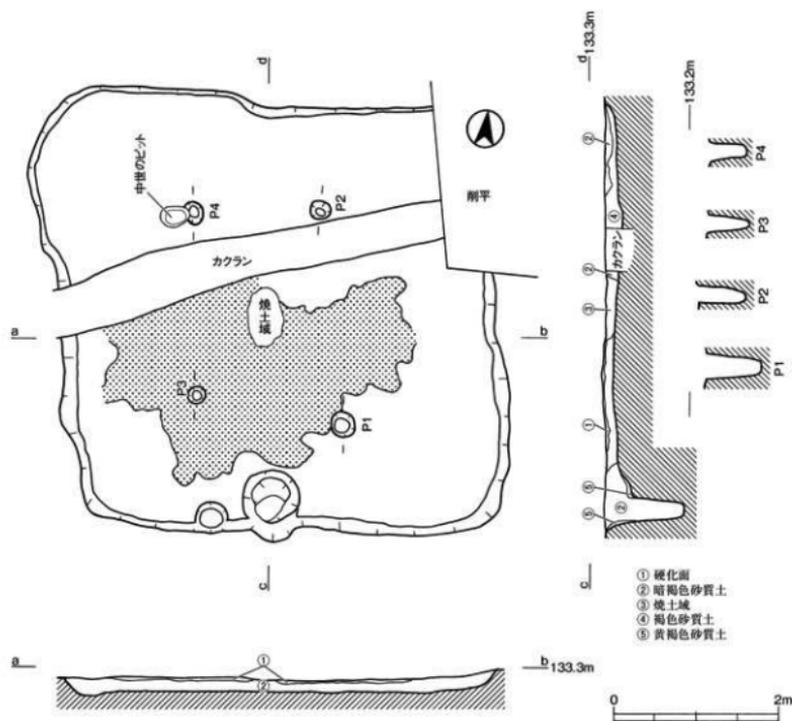
1・2は甕形土器の口縁部～胴部である。1は口縁端部から頸部にかけてやや外側に開き口唇部は平らになり外面にスガが付着している。2は口唇部から頸部にかけてやや内湾していく器形をしている。3は甕形土器の口縁部である。口唇部は舌状で頸部に掻き上げが見られる。口唇部はやや外側に開くと思われる。4・5は甕形土器の胴部である。4は頸部が若干残っており、胴部と頸部に一段段差があり、明瞭な稜をもっておりその部分はハケメによる調整がある。5の外面はハケメによる調整がある。6は甕形土器の脚部である。7は壺形土器の口縁部である。口唇部は舌状で、口縁端部に一条の沈線が入る。焼成は良く、胎土に石英、小礫を含む。8は壺形土器の胴部であり、外面に突帯を有している。10・12は壺形土器の胴部～底部にかけてである。10の焼成は良く、外面はミガキによる調整がほどこされている。また、底面は丸味を帯びている。12は底部から胴部、頸部とはほぼ完形になる。肩部に、一条の突帯を有する。突帯はすれ違い状に貼り付けてあり、布目刻みの調整が施されている。



第150図 47号竪穴住居跡



第151图 47号竖穴住居跡出土遺物



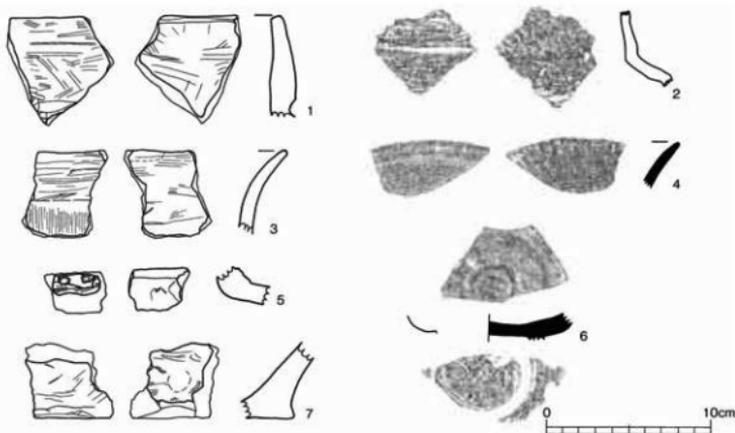
第152図 48号竪穴住居跡

48号竪穴住居跡 (第152図)

B-33区, IIIa層で検出した。形状は長軸約532cm×短軸約522cmの方形である。検出面から床面までの深さは約35cmである。東側は確認トレンチのため削平されており、住居内部を東西方向に、農業用水パイプが埋設されており、全体的なプランを確認することはできなかった。埋土を掘り下げていくと、この住居の床面と思われる貼り床が明瞭に残存していた。また、貼り床面中央部に長軸約70cm、短軸約30cmの炬跡と思われる焼土域が確認できた。南側壁面には、長軸約90cm×短軸約70cmの土坑が1基検出された。土坑の深さは、検出面から約60cmである。

この住居からは4基のピットが検出され、住居の中央部に長方形の形に配列されている。それぞれのピット間の距離は、P1→P3が約180cm、P3→P4が約220cm、P4→P2が約150cm、P2→P1が約240cmである。これらのピットの断面の形状をみると、杭状になるものや下面部が平坦になるものがある。それぞれのピットの検出面からの深さは、約40cm～約60cmであり、規格性が窺える。このようなことから、これらのピットはこの住居に伴う、柱穴の可能性が高いと考えられる。

出土遺物は甕形土器や壺形土器の土器片が出土し、接合作業等を経て7点を図化した。



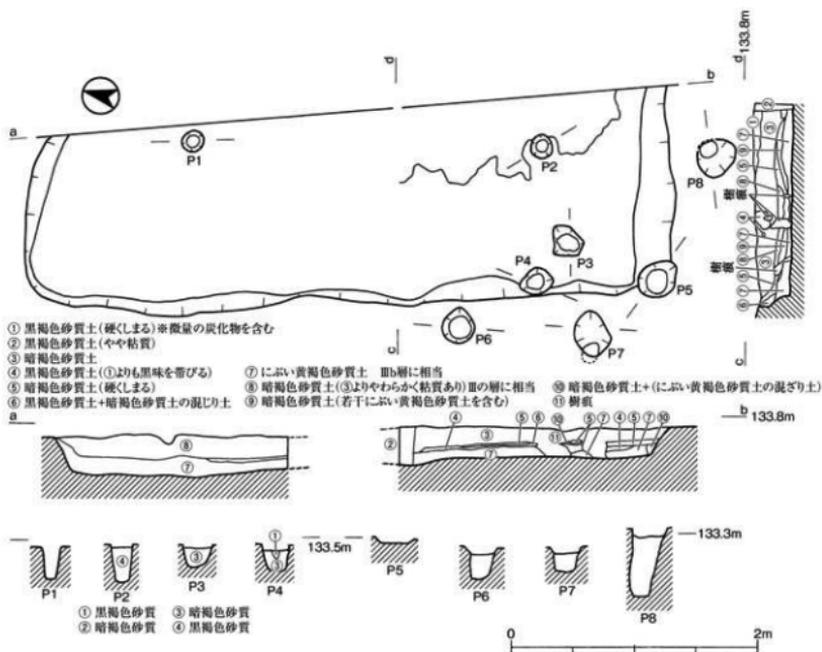
第153図 48号竪穴住居跡出土遺物

48号住居跡出土遺物 (第153図 1～7)

1～3は甕形土器である。1・3は口縁部である。口唇部の形状は舌状である。器形は、1は内弯していく。3は頸部方向から口唇部に向かって外反する。5は壺形土器の肩部である。一条の突帯を有し突帯には竹管文がほどこされている。4・6は須恵器である。器種は碗形になるのではないと思われる。これら2点は接合はされないものの、同一個体の可能性が極めて高い。この須恵器は7世紀後半から8世紀初頭のものである。

第39表 48号竪穴住居跡出土遺物観察表

棟号	住居NO	番号	器種	部位	口径			器高		器型・文様		色調		胎土	備考
					OR	OR	OR	外面	内面	外面	内面	外面	内面		
153	48	1	甕	口縁部	—	—	—	ナデ	ナデ	楕	楕	石灰、黒石、角閃石	—		
		2	甕	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	楕	にふい黄緑	石灰、黒石、角閃石	—		
		3	甕	口縁部	—	—	—	ナデ、ハケメ	ナデ	楕	楕	石灰、黒石、角閃石	—		
		4	碗	口縁部	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	楕	灰緑	—	須恵器		
		5	壺	肩部	—	—	—	ナデ	ナデ	楕	赤褐	石灰、黒石、角閃石	—	竹管文	
		6	碗	底部	—	6.4	—	ロクロナデ	ロクロナデ	楕	黄灰	—	—	須恵器	
		7	鉢	底部	—	—	—	ナデ	ナデ	にふい楕	にふい楕	石灰、黒石、角閃石	—		



第154図 49号竪穴住居跡

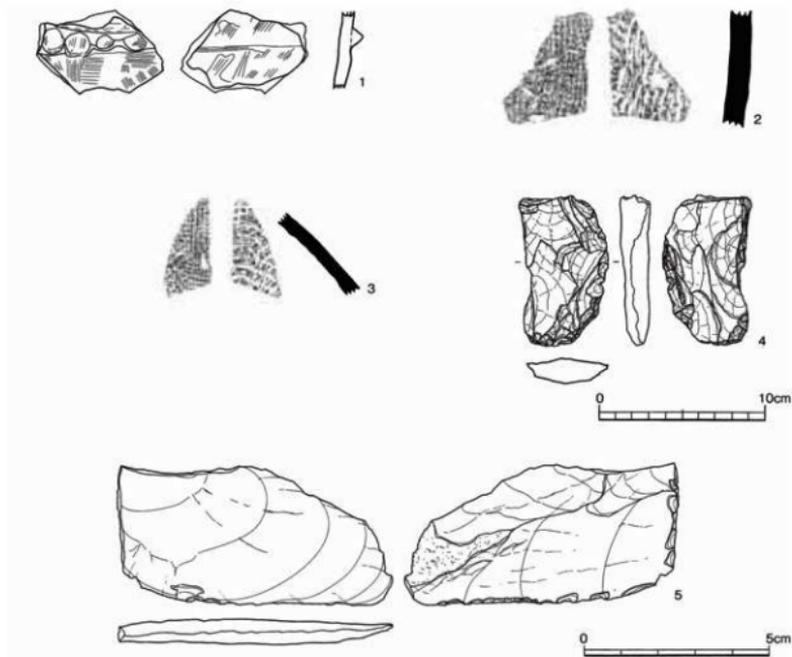
49号竪穴住居跡(第154図)

A-33・34区、Ⅲa層で検出された。東側は、調査区外であるため、形状の全容ははっきりしないが、長軸約508cm×短軸約165cmの方形を呈するものと考えられる。埋土を掘り下げていく過程で、長方形に色の違うプランを確認した。東側の壁で埋土を観察しながら、中央から掘り下げていった。この区の周辺は、圃場整備のため、古墳時代の包含層であるⅢ層は削平を受けているため、検出面から床面までの深さは、約20cmと比較的浅い。床面は硬く締まった貼り床が明瞭に残存する。

この住居の中及び周辺でピットが8基検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P2が約280cm、P2→P3が約80cm、P3→P4が約60cm、P6→P5が約160cm、P5→P7が約80cm、P7→P8が約180cmである。これらのピットの検出面からの深さは、平均で約30cm~40cmである。形状はピット下面部が平坦になっているものがほとんどである。これらのピットがこの住居に伴う柱穴の跡になるかどうかは、住居跡の残存面積が小さく住居の全体プランがはっきりしないため判断することはできない。

科学分析の項で説明してあるが、この住居から出土した炭化物の樹種同定を行った結果、袖須の木との分析結果がでている。

出土遺物は床面に附着して成川式土器が出土し、接合作業等を経て3点の土器と2点の石器を図化した。



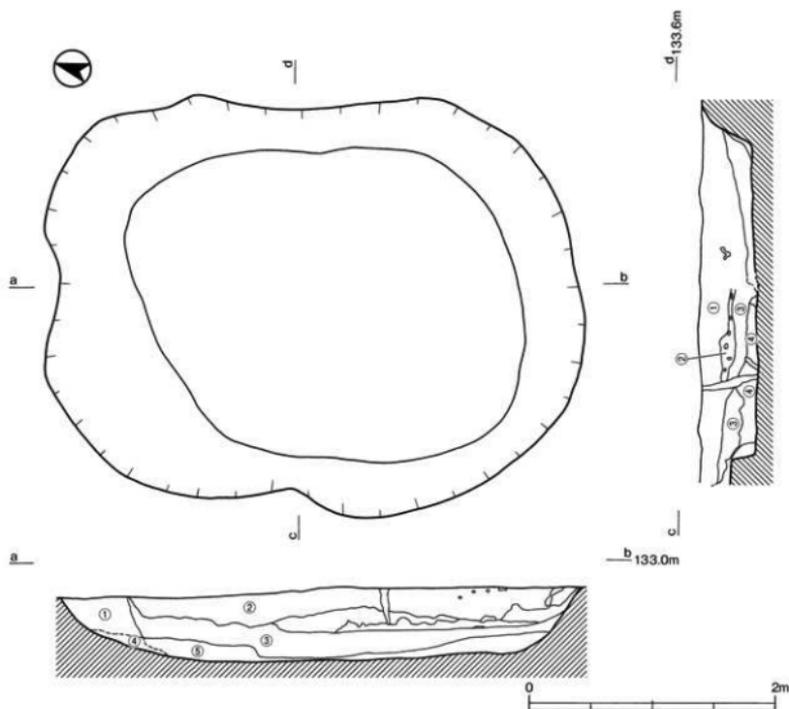
第155図 49号竪穴住居跡出土遺物

49号竪穴住居跡出土遺物(第155図 1~5)

1は甕形土器の肩部である。一条の突帯を有する。突帯の調整は布目刻みである。2と3は、須恵器の甕である。2・3は両方とも外面は格子目タタキ、内面同心円当て具が施されている。4の石器は石製土掘り具であると思われる。5はスクレーパーである。

第40表 49号竪穴住居跡出土遺物観察表

検出番号	住居NO	遺物番号	器種	部位	口径			器高	調整・文様		色調		胎土	備考
					OR	OR	OR		外面	内面	外面	内面		
155	49	1	甕	肩部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石英、長石、角閃石	布目刻突帯	
		2	甕	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円当て具	灰白	灰白	石英	調整器	
		3	甕	胴部	-	-	-	格子目タタキ	同心円当て具	灰	灰	石英	調整器	
検出	住居NO	番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考					
					OR	OR	OR			g				
155	49	4	打製石片	ホルンフェルス	9.1	5.4	1.5	106.78	-					
		5	微細調整器残片	ホルンフェルス	3.2	7.5	0.7	22.39	-					



- ① 暗褐色砂質土 やや硬くしまる (10YR 3/4)
 ② 黒褐色砂質土 (10YR 3/3)
 ③ 暗褐色砂質土 (ややしまった感じ
 バミス、スミ④の層が混在している
 ①の層が漸移的にうすくなった感じ) (10YR 3/3)

- ④ 褐色砂質土 ①の層が漸移的にうすくなった感じであるが①よりも硬くなっている (10YR 4/4)
 ⑤ 褐色砂質土 ④層よりも若干暗い感じ、色調的にはほとんど区別がつかない質的には④層より硬くしまっておらずサラサラしている (10YR 4/4)

第156図 50号竪穴住居跡

50号竪穴住居跡 (第156図)

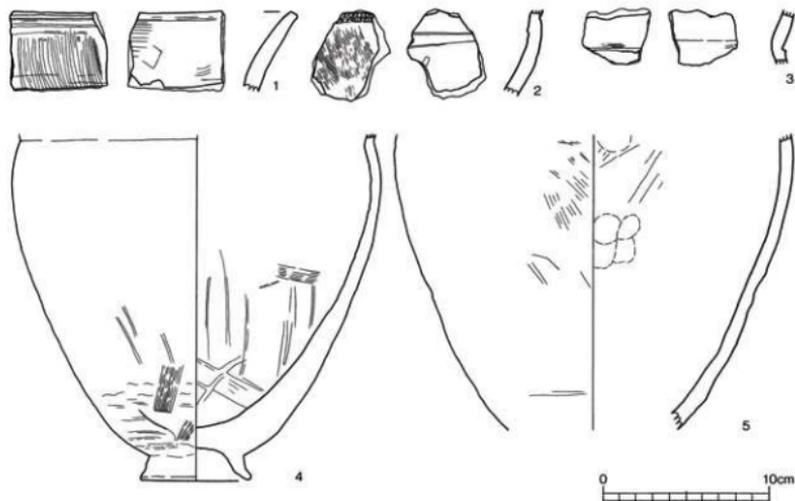
B-33・34区、Ⅲa層で検出された。形状は長軸約430cm×短軸約320cmの楕円形を呈する。埋土を掘り下げていく過程で、楕円形の色の違いを確認した。埋土観察のベルトを設定して、中央部分から床面を確認していった。この住居からは、床面と思われる硬化面は一部分しか明瞭に残存していなかった。検出面から床面までの深さは、約50cmである。

この住居からは、ピットは確認することはできなかった。

埋土中から、成川式の壺形土器や壺形土器の土器片が出土した。出土遺物は接合作業を経て5点を図化した。

50号竪穴住居跡出土遺物 (第157図 1～5)

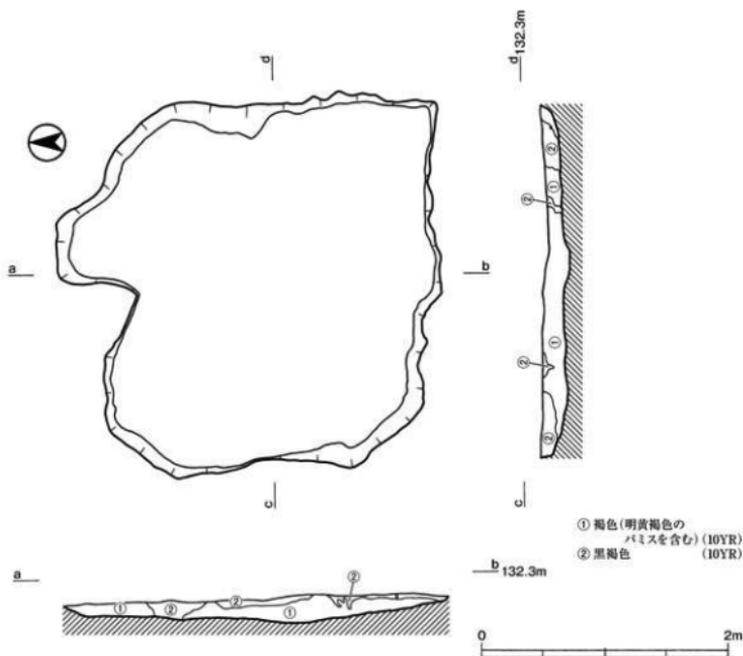
1～4は壺形土器である。1の口唇部は平坦であり、調整は頸部にハケメがある。4は胴部～底部である。器形は、1・3は頸部方向から口唇部にかけて外反するものである。5は壺形土器の胴部である。



第157図 50号竪穴住居跡出土遺物

第41表 50号竪穴住居跡出土遺物観察表

検出	住居NO	番号	器種	部位	口径			調整・文様		色調		附土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面		
157	50	1	壺	口縁部	—	—	—	ハケメ	ナデ	浅黄	浅黄	石灰、炭石、黄閃石	内面スス付着
		2	壺	頸部	—	—	—	工具ナデ	工具ナデ	黒褐色	黒褐色	石灰、炭石、黄閃石	—
		3	壺	頸部	—	—	—	ナデ	ナデ	黒	にじい赤褐色	石灰、炭石、黄閃石	—
		4	壺	胴～底部	—	6.4	—	ナデ	ナデ	にじい褐色	にじい褐色	石灰、炭石、黄閃石	—
		5	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	石灰、炭石、黄閃石	—



第158図 51号竪穴住居跡

51号竪穴住居跡 (第158図)

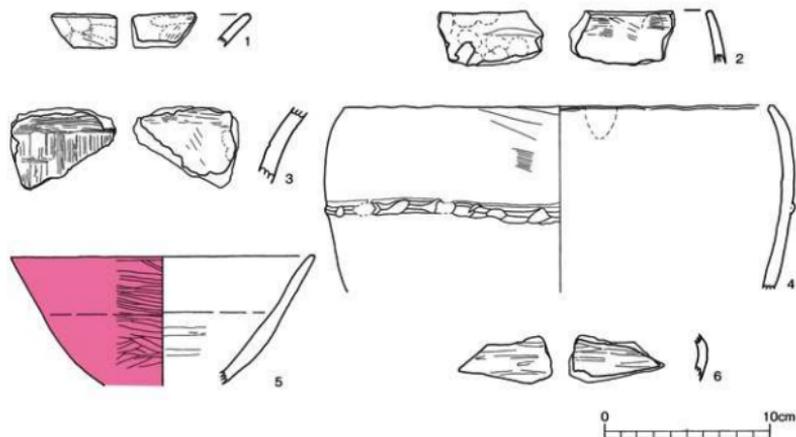
A・B-34区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約308cm×短軸約290cmの不定形である。埋土を掘り下げていく過程で、不定形に色の違うプランが検出された。埋土観察のベルトを設定して、中央部分から床面を確認していった。掘り下げていくと床面と思われる硬化面が明瞭に残存していた。検出面から床面までの深さは約21cmを測る。

この住居からは、ピットは検出されなかった。

出土遺物は、成川式土器の甕形土器や壺形土器が出土し、接合作業を経て9点を図化した。

51号住居出土遺物 (第159図 1～6)

1～4は甕形土器である。口唇部の形状は、舌状になるものばかりである。2・4の器形は、口唇部が中央にやや内湾する器形をしている。4は一条の突帯を有し突帯の調整は指オサエである。5は高坏の坏部で器面調整は丁寧に研磨されており、表面に赤色顔料が塗布されており、胴部に明瞭な稜をもつものである。6は高坏の筒部である。



第159図 51号竪穴住居跡出土遺物

第42表 51号竪穴住居跡出土遺物観察表

神宮	住居 NO	番号	器種	部位	口径	底径	器高	調整・文様				胎土	備考
					cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面		
159	51	1	壺	口縁部	-	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ	にぶい縞	にぶい縞	石灰、長石、角閃石	-
		2	壺	口縁部	-	-	-	ナデ・指オサエ	ナデ	にぶい縞	にぶい縞	石灰、長石	-
		3	壺	胴部	-	-	-	ハケメ縞ナデ	ナデ	にぶい赤縞	にぶい赤縞	石灰、長石、角閃石	-
		4	壺	口縁~胴部	26	-	-	ハケメ、指ナデ	指オサエ、ナデ	にぶい黄縞	にぶい黄縞	石灰、長石、角閃石	指縁部付近の窪みで調整用の安室
		5	高杯	杯部	14.6	-	-	ヘラミガキ	丁寧なナデ	赤	にぶい縞	石英、長石	赤色顔料
		6	高杯	胴部	-	-	-	ミガキ	ナデ	灰縞	黒縞	石灰、長石、角閃石	-

52号竪穴住居跡(第160図)

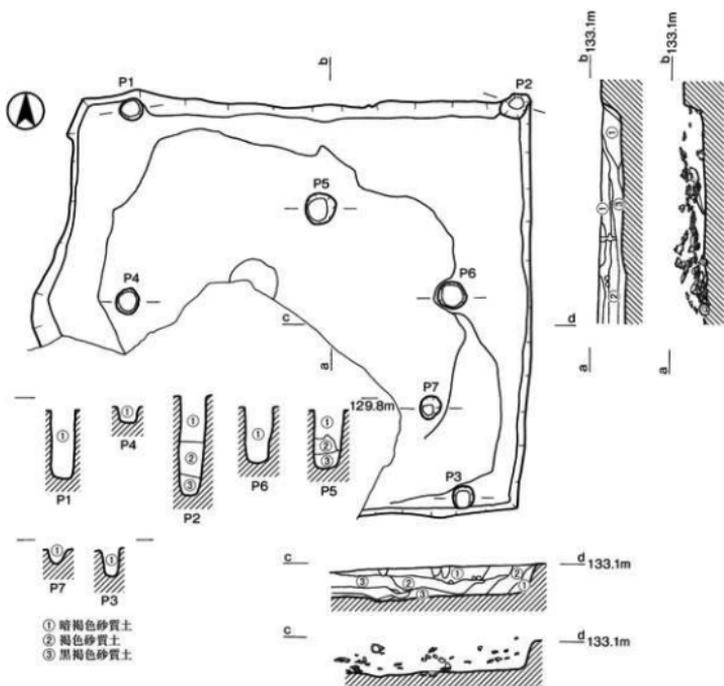
B-34・35区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約415cm×短軸約330cmの方形である。この区は圃場整備によって、削平を受けている場所であるが、埋土を掘り下げていく過程で、色の違う方形のプランが検出され、埋土観察のベルトを設定して、床面を確認しながら掘り下げていった。南側は、中世の遺構である、3号竪穴建物跡と4号竪穴建物跡に切られている。検出面からの深さは約20cmである。全体的に削平を受けており、側壁が浅い。この住居の特徴は、中心に深さ約10cm直径約40cmの浅い土坑がある。この土坑から炭化物が出土し火熱を受け赤くなった焼土を検出した。このことからこの土坑は、炬跡であると考えられる。床面は、炬跡を中心に貼り床が残存している。

この住居からは7基のピットが検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P2が約320cm、P2→P3が約320cm、P5→P6が約140cm、P6→P7が約100cm、P7→P4が約260cm、P4→P5が約180cmである。これらのピットはその位置と形状からこの住居に伴う柱穴になると考えられる。

住居床面より、成川式土器の高坏や甕形土器等が出土した。出土遺物の中には、高坏の脚部を輪の羽口に転用したものもあり、鉄滓も出土した。このことから、この住居では鍛冶を行って居た可能性も考えられる。出土遺物は接合作業を経て、24点を図化した。

52号住居出土遺物(第162図～165図 1～40)

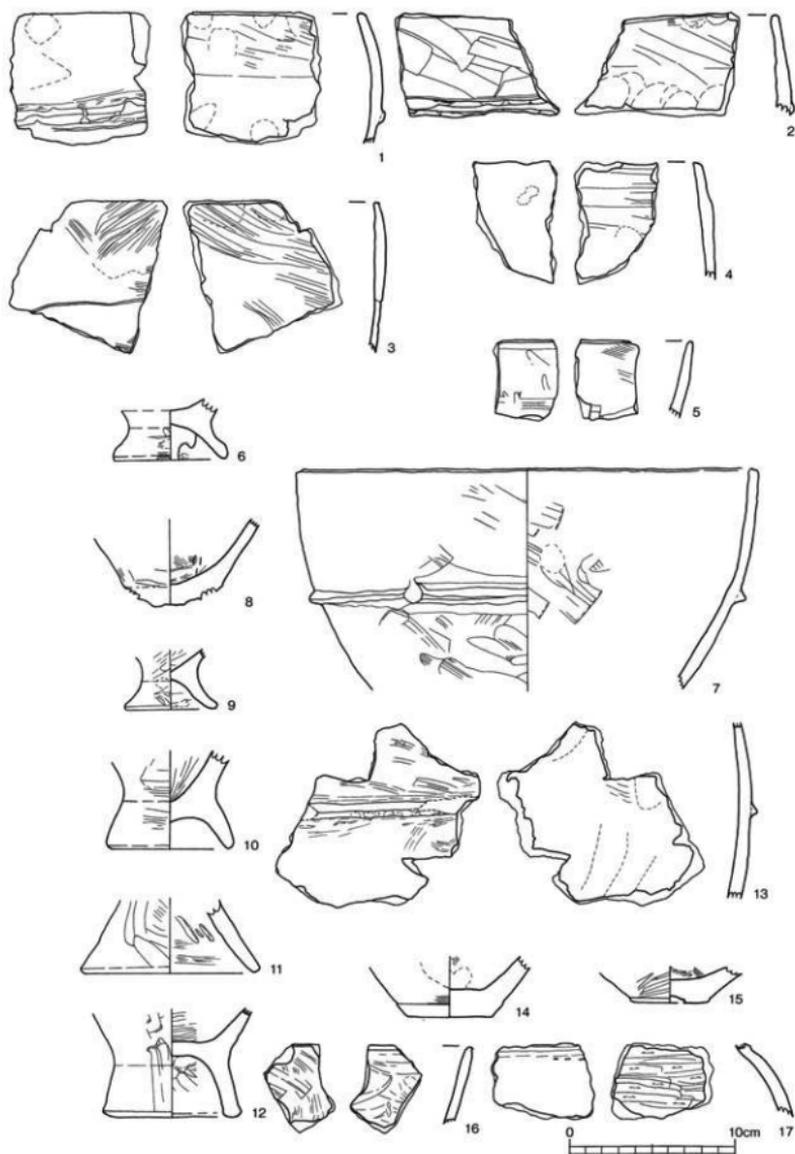
1～5・7・16は甕形土器の口縁部～胴部である。口唇部の形状は、1～5は舌状であり、7は平坦である。器形は、口唇部がやや内湾する器形をしている。13は甕形土器の胴部である。7・13は一条の絡縄突帯が施されている。調整はナデによるものである。7の外面の色調は、全体が黒褐色であり、これは焼成の段階でこのような色になったのものであると考える。17・19・20・23は壺形土器の胴部である。23の外表面はミガキによる調整がほどこされている。18は壺形土器の口縁部～胴部である。頸部に一条の突帯を有する。調整は丁寧で内外面はミガキによる調整がほどこされている。24～28は鉢形土器の口縁部～胴部である。つくりは丁寧でミガキによる調整がほどこされている。34は高坏の脚部～筒部である。30は高坏の坏部である。29は高坏の完形である。32・33は高坏の脚部を輪の羽口に転用しているものである。外面に火熱を受けて変色した部分が顕著に見られる。37は壺形土器の頸部か肩部である。38は壺形土器の胴部～底部である。39・40はミニチュア土器である。手捏技法で作られている。



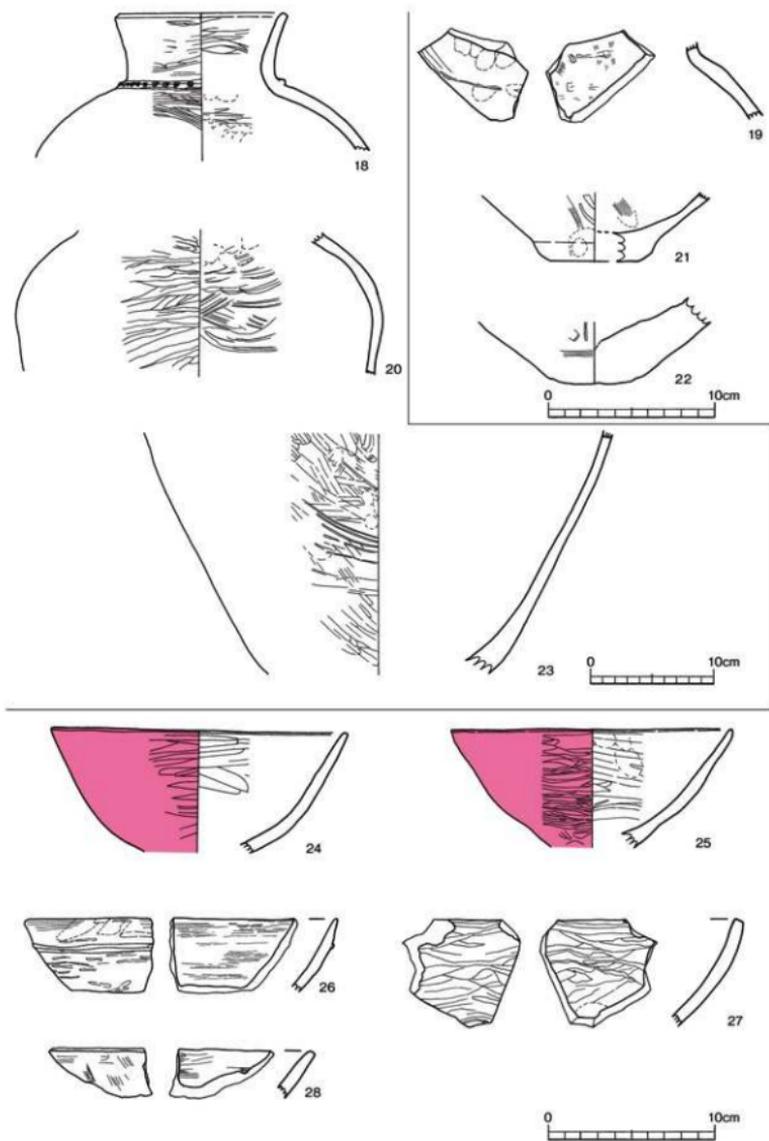
第160图 52号竖穴住居跡



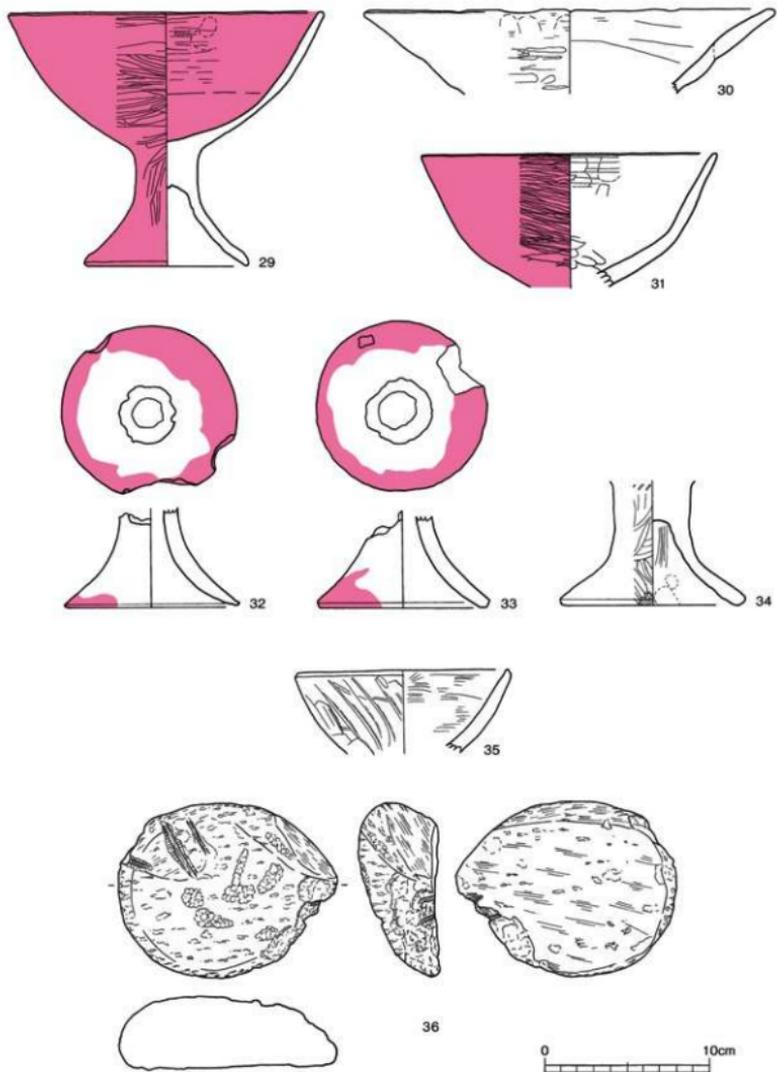
第161图 52号竖穴住居跡遺物出土状況



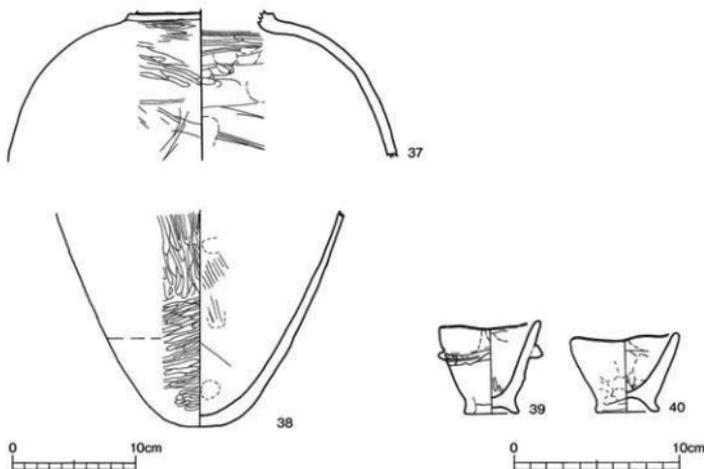
第162图 52号竖穴住居跡出土遺物(1)



第163图 52号竖穴住居跡出土遺物(2)



第164图 52号竖穴住居跡出土遺物(3)



第165図 52号竪穴住居跡出土遺物(4)

第43表 52号(1) 竪穴住居跡出土遺物観察表

神宮	住居 NO	番号	器種	部位	口径		器高	調整・文様		色調		胎土	備考
					内	外		外面	内面	外面	内面		
162		1	壺	口縁-頸部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	橙	石灰、長石、角閃石	-
		2	壺	口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		3	壺	口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒褐色	暗赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		4	壺	口縁-頸部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		5	壺	口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒褐色	にぶい赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		6	壺	胴部	-	6.8	-	指オサエ、ナデ	ナデ	にぶい赤褐色	にぶい赤褐色	石灰	-
		7	壺	口縁-頸部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		8	壺	底部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐色	暗赤褐色	石灰	-
		9	ミニチュア	胴部	-	5.6	-	ヘラミガキ	ナデ	暗赤褐色	暗赤褐色	石灰	-
		10	壺	胴部	-	7.6	-	ナデ	ナデ	黒	黒	石灰	-
		11	壺	胴部	-	10.8	-	ヘラナデ	ナデ	にぶい褐色	にぶい褐色	石灰	-
		12	壺	底部	-	8.4	-	ナデ	指オサエ、ナデ	にぶい赤褐色	暗赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
52		13	壺	胴部	-	-	指ナデ、ケズリ	丁寧なナデ	にぶい明褐色	にぶい明褐色	石灰	-	
		14	壺	底部	-	5.2	指オサエ、ナデ	指オサエ	黒褐色	灰褐色	石灰	-	
		15	壺	底部	-	4.1	-	ミガキ	指オサエ、ナデ	黒	暗赤褐色	石灰	-
		16	壺	口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黒	黒	石灰、長石、角閃石	-
		17	壺	胴部	-	-	-	ナデ、工具ナデ	ナデ、工具ナデ	黒	橙	石灰、長石、角閃石	-
		18	壺	口縁-胴部	10.3	-	-	ミガキ	ナデ	明赤褐色	にぶい明褐色	石灰、長石、角閃石	-
		19	壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	明赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		20	壺	胴部	-	-	-	ミガキ	ナデ	橙	橙	石灰、長石、角閃石	-
163		21	壺	底部	-	5.5	-	指オサエ、ナデ	ナデ	黒	赤褐色	石灰	-
		22	壺	底部	-	2.8	-	ナデ	摩耗	にぶい明褐色	摩耗	石灰、長石	-
		23	壺	口縁-胴部	-	-	-	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		24	高坪	坪部	19	-	-	ミガキ	ミガキ	赤	赤	石灰	赤色顔料
		25	高坪	坪部	17.5	-	-	ミガキ	ナデ	赤	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	赤色顔料
		26	鉢	口縁-胴部	-	-	-	ミガキ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	-
		27	鉢	口縁-頸部	-	-	-	ミガキ	ミガキ	にぶい黄褐色	黒褐色	石灰、長石、角閃石	-
		28	鉢	口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	橙	にぶい褐色	長石、角閃石	-

53号竪穴住居跡(第166図)

C-33区、Ⅲa層で検出した。形状は長軸約368cm×短軸約190cmの方形である。この住居の南側は、54号住居と切り合い関係になっているため全てのプランは確認することはできないが56号住居のような形状になるのではないかと考えられる。検出面からの床面までの深さは約32cmである。この住居の南北に、畑地灌漑用のパイプが埋設されていたため、その部分は掘り下げることはできなかった。

この住居からは、6基のピットが検出された。これらのピットは、密集した形で検出されている。それぞれのピット間の距離は、P1→P2、P2→P3、P4→P6、P5→P6の間がいずれも約40cmである。ピットの検出面からの深さはいずれも約20cm～約50cmである。断面の形状は同じである。これらのことから、これらのピットはこの住居に伴う柱穴の跡の可能性が高いと考える。

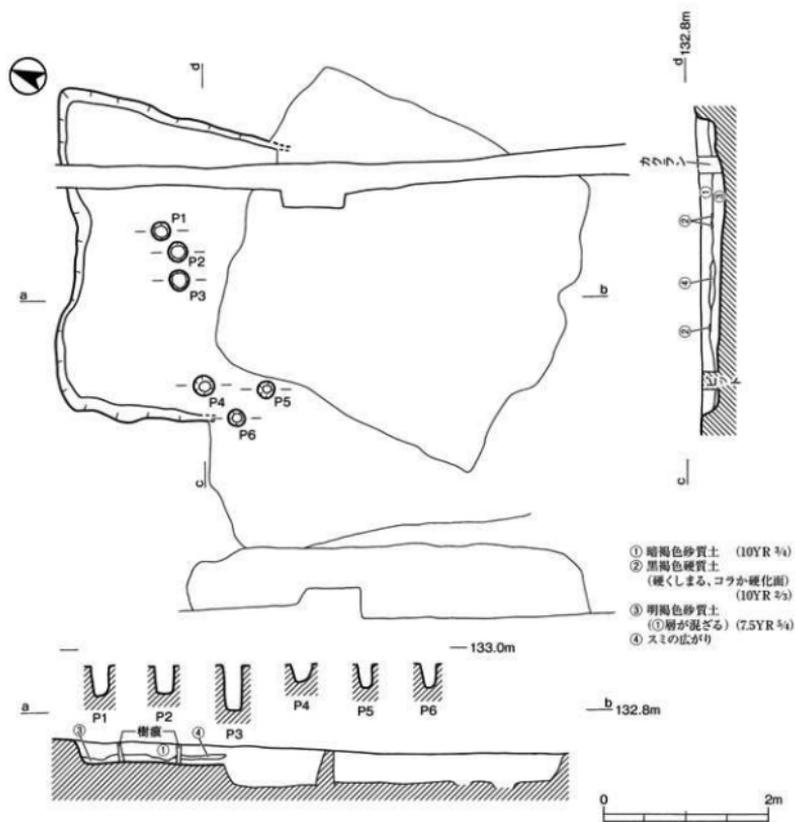
出土遺物は、成川式の甍形土器や壺形土器が出土し接合作業等を経て6点を図化した。

53号竪穴住居跡出土遺物(第167図 1～6)

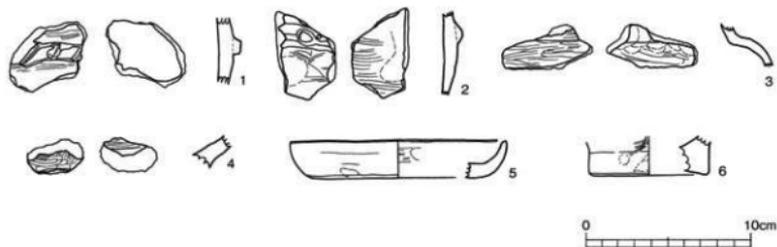
1・2は壺形土器の胴部である。一条の突帯を有している。3・4の外表面は、きれいな研磨で仕上げられており、赤色顔料が塗布されている。4は高坏である。6の器種は不明であるが、底部である。

第44表 52(2)・53号竪穴住居跡出土遺物観察表

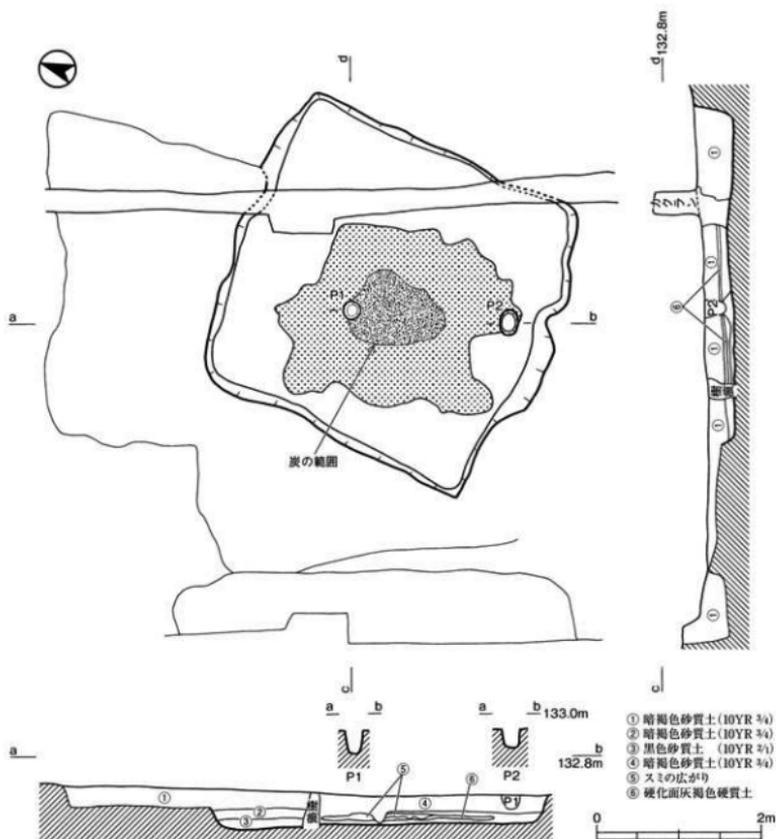
検出番号	住居NO	遺物番号	器種	部位	口径			底径		器高		調整・文様		色調		胎土	備考
					cm	cm	cm	cm	cm	cm	外面	内面	外面	内面			
164	52	29	高坏	実形	19.3	10.6	15.7	ミガキ	ナデ	赤	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	赤色顔料				
		30	高坏	坏部	25.4	—	—	ナデ	ナデ	黒褐色	にがい褐色	石灰、長石	黒粒あり				
		31	高坏	坏部	18.1	—	—	ミガキ	ナデ	赤褐色	にがい赤褐色	長石、角閃石	赤色顔料				
		32	高坏	胴部	—	11.2	—	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	腫の跡口				
		33	高坏	胴部	—	10.6	—	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	腫の跡口				
		34	高坏	胴部	—	11.5	—	ミガキ	ナデ	赤褐色	にがい赤褐色	石灰、長石、角閃石	—				
35	鉢	口縁-胴部	13	—	—	工具ナデ	ナデ	橙	にがい橙	石灰、長石、角閃石	—						
165	53	37	壺	頸-胴部	—	—	—	ミガキ	ナデ	暗赤褐色	橙	石灰、長石、角閃石	—				
		38	壺	頸-底部	—	3.6	—	ミガキ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	石灰、長石、角閃石	—				
		39	ミニチュア	実形	5.4	3	5.4	指オシエ、ナデ	ナデ	赤褐色	赤褐色	石灰、長石、角閃石	—				
		40	ミニチュア	実形	6.6	4.2	4.5	指オシエ、ナデ	ナデ	灰褐色	にがい褐色	石灰、長石、角閃石	—				
167	53	1	壺	胴部	—	—	—	ナデ	摩耗	赤褐色	にがい赤褐色	石灰、長石	—				
		2	壺	胴部	—	—	—	ナデ	ナデ	橙	明赤褐色	石灰、長石	—				
		3	小型丸底壺	胴部	—	—	—	ミガキ	ミガキ	赤	にがい橙	石灰、長石、角閃石	赤色顔料				
		4	高坏	坏部	—	—	—	ミガキ	ナデ	赤	褐色	石灰、長石、角閃石	赤色顔料				
		5	鉢	口縁-底部	13.1	10.2	2.2	ナデ	ナデ	赤褐色	にがい褐色	石灰、長石、角閃石	—				
		6	不明	底部	—	7.4	—	ナデ	ナデ	赤褐色	明赤褐色	石灰	—				
検出NO	住居NO	番号	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	備考								
164	52	36	軽石製品	軽石	10.5	13.3	4.3	216	—								



第166図 53号竖穴住居跡



第167図 53号竖穴住居跡出土遺物



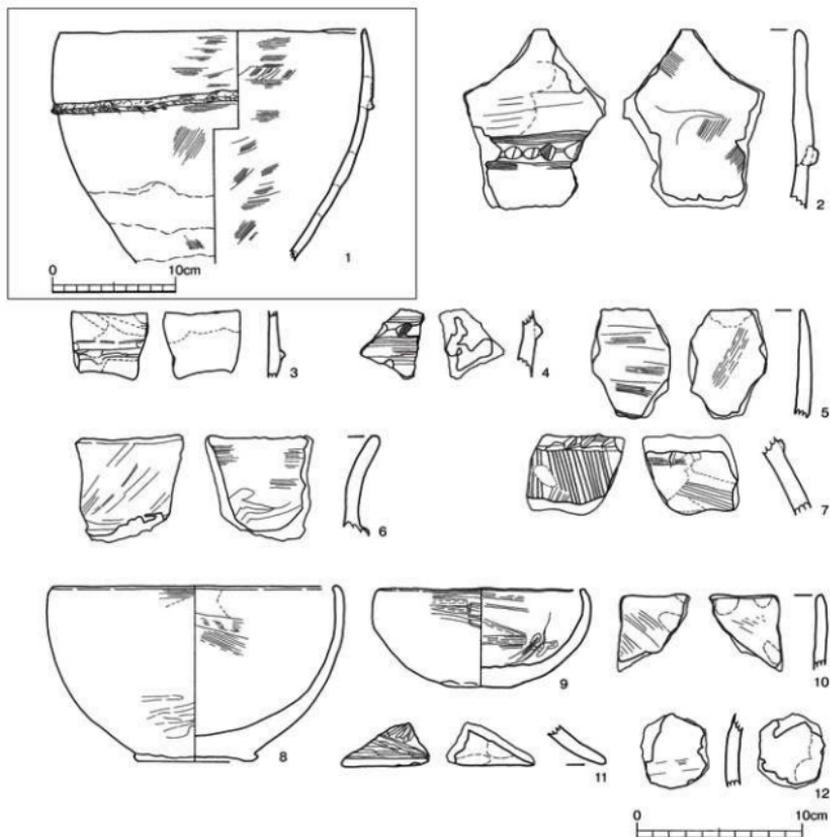
第168図 54号竪穴住居跡

54号竪穴住居跡 (第168図)

C-33・34区、Ⅲa層で検出された。形状は長軸約416cm×短軸約410cmの方形である。北側は、53号住居と切り合い関係にある。埋土を掘り下げていく過程で、色の違う方形のプランを確認した。埋土観察のベルトを設定して中央から床面を確認しながら掘り下げていった。南北に、畑の灌漑用のパイプが埋設されていたため、その部分は掘り下げることはできなかった。中央部に、焼土や炭化物を含む黒色土が広がっており、床面は硬く締まった貼り床が明瞭に残存していた。検出面から床面までの深さは約50cmである。

住居中央部よりピットが2基検出された。それぞれのピット間の距離は、P1→P2が約190cmである。この二つのピットは、直線上に並び、それぞれ形状が類似している。このことから、この住居に伴う柱穴の跡であると考えられる。

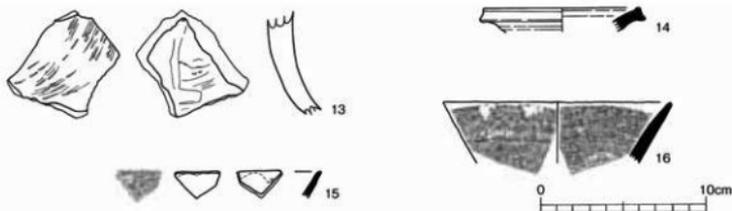
出土遺物は、床に付着する形で、成川式土器の甕形土器や壺形土器が出土し、接合作業等を経て16点を図化した。



第169図 54号竪穴住居跡出土遺物(1)

54号竪穴住居跡出土遺物(第169図・170図 1~16)

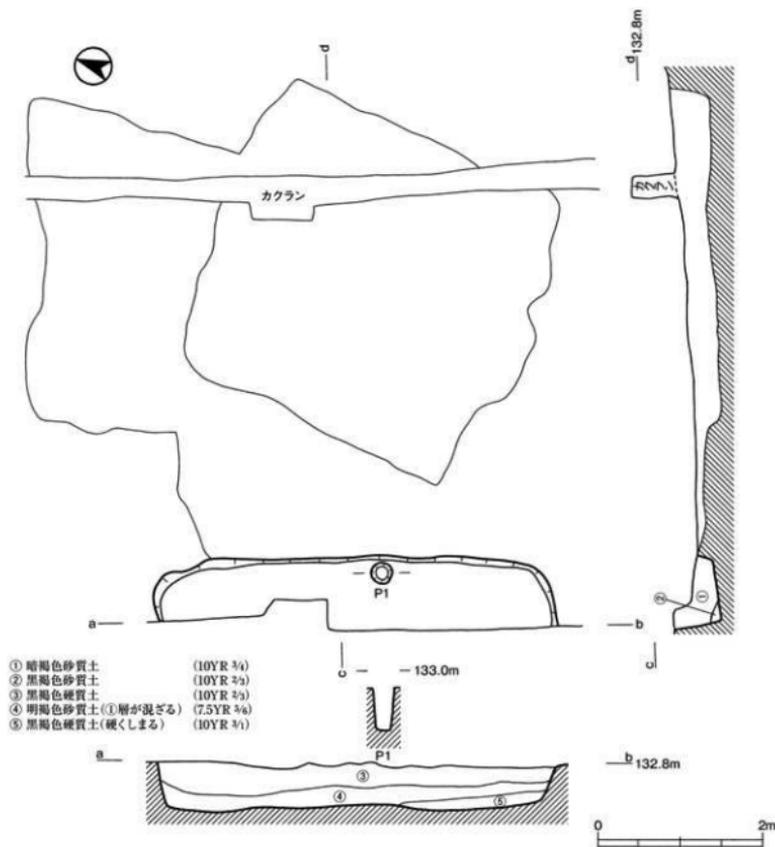
1・2は甕形土器の口縁部～胴部である。一条の絡縄突帯を施すものである。口唇部の形状は、舌状である。器形は、頸部で外側にやや張り出し、口唇部に向かって内湾していく器形をしている。6は壺形土器の口縁部である。4・7は壺形土器の肩部である。一条の突帯を有する。突帯の調整は布目刻みである。8・9は鉢形土器である。9は完形で外面の器面調整はヘラナデである。8は内外面とも丁寧なナデが施されている。11は高坏の脚である。外面の器面調整はミガキであり、表面には赤色顔料が塗布されている。14~16は須恵器である。14は長頸壺の口唇部の可能性がある。



第170図 54号竪穴住居跡出土遺物(2)

第45表 54号竪穴住居跡出土遺物観察表

検出	住居NO	番号	器種	部位	口径		器高	調整・文様		色調		胎土	備考
					内	外		外面	内面	外面	内面		
169	54	1	壺	口縁-胴部	24.6	-	-	ナデ	ナデ	明褐色	黄褐色	角閃石、石英	-
		2	壺	口縁-胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	赤褐色	明褐色	石英	-
		3	壺	胴部	-	-	-	ナデ	ナデ	黄褐色	黄褐色	角閃石、緑石	-
		4	壺	胴部	-	-	-	ナデ	厚粒	明褐色	橙	角閃石	-
		5	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	褐	明褐色	角閃石、石英	-
		6	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	明褐色	暗褐色	石英	-
		7	壺	胴部	-	-	-	ハケメ	ナデ	明褐色	明褐色	角閃石、雲母	-
		8	鉢	底部	18.1	7.2	10.6	丁寧なナデ	丁寧なナデ	赤褐色	赤褐色	石英、長石	-
		9	鉢	底部	13.4	3.8	6.1	ヘラナデ	ナデ	橙	橙	石英、長石、角閃石	-
		10	壺	口縁部	-	-	-	ナデ	丁寧なナデ	黄褐色	褐	角閃石、石英	-
		11	高坏	胴部	-	11.4	-	ミガキ	抜オサエ	赤	暗赤褐色	石英、長石、角閃石	赤色顔料
		12	円盤状土製品	-	-	-	-	ナデ	ナデ	黄褐色	明黄褐色	石英	-
170	54	13	高坏	胴部	-	-	-	ミガキ	ナデ	赤	にじみ	石英、長石、角閃石	赤色顔料
		14	具頸壺	口縁部	5.1	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	石英	調整器
		15	小型丸底壺	口縁部	-	-	-	ナデ	ナデ	灰	灰	石英	調整器
		16	坪	口縁部	14	-	-	ナデ	ナデ	褐色	灰	石英	調整器



55号竪穴住居跡 (第173図)

C-33・34区, III a層で検出された。形状は長軸約482cm×短軸約90cmの不定形である。西側の一部は調査区外であったため、一部分のみの検出である。埋土を掘り下げていく過程で、方形の色の違うプランを確認した。西側の壁で埋土観察を行いながら掘り下げていくと、この住居の床面と思われる、硬くしまった硬化面が残存していた。検出面から床面までの深さは約60cmである。

住居の東側壁面で1基のピットが検出された。住居の検出部分が少なく全容が不明であるが、他の住居の状況から考えて、このピットの位置及び形状は、この住居に伴う柱穴の跡の可能性が高いと考える。

出土遺物は、成川式土器の土器片が出土し、接合作業等を経て4点を図化した。